

# 認知症 検診で早期発見

## 初期治療できれば 進行ゆっくりに

近い将来、高齢者の五人に一人がなるとされる認知症。初期の段階で治療すれば進行を遅らせることが期待できるため、もの忘れなどを自覚したら医療機関で検査を受けることが大切だ。定期的な検診制度を設け、精密検査の費用を全額助成する自治体も出てきた。

(河野紀子)

「患者は七十〜八十代が中心で、症状が進んでから家族に連れられて受診するケースが多い。おかしいと思ったら早めに認知機能の検査を受けてほしい」。認知症に詳しい僧行会城西病院（名古屋市中村区）院長の錫村明生さん（せむきは言う）。

認知症は、脳の神経細胞の働きが鈍くなり、記憶や判断力が低下する。日本人患者の約六割は特殊なタンパク質がたまって脳が萎縮するアルツハイマー型で、そのほかに脳梗塞などに起因する血管性、レビー小体型といったタイプに分かれる。それぞれ治療法が異なるため、型を特定することが大切になる。

厚生労働省の推計では、二



脳の機能を調べるSPECT検査を説明する錫村明生院長＝名古屋市中村区の僧行会城西病院で

〇二五年には六十五歳以上の20%に相当する七百万人が認知症になる。錫村さんは「高齢者は誰でもなる可能性があるが、身近な病気」と指摘。一方で「一般の人が初期の段階で認知症かどうかを見分けるのは非常に難しい」と話す。早期の診断、治療につなげ

るため、名古屋市は二〇年一月から「もの忘れ検診」を開始。認知症と診断されていない六十五歳以上の市民を対象に年一回、市内の協力医療機関で認知機能を調べる簡易テストを無料で受けられるようにした。その結果、精密検査が必要と判断された人は、後日に脳の状態を調べるMRI検査やSPECT検査などを受けて確定診断する。

市によると、今年三月末までにもの忘れ検診を受けたのは約二万五千六百二人（受診率

## 名古屋市 検査費用を全額助成

名古屋市に住む女性（60）の80代の義母は2019年2月、アルツハイマー型認知症と診断された。前年夏ごろからもの忘れがひどくなり、料理や掃除など身の回りのことができなくなった。市の検診制度が始まる前で、近くの総合病院で認知機能の検査を受けた。女性は「義母とどう接していいかわからなかったので、認知症と分かって安心した」と振り返る。

義母は通院して薬を飲み、症状は落ちついた。女性は義母に付き添い、おかしな言動をした時も怒らずに諭すよう心がけることで、介護にうまく向き合えたという。「医師や病院スタッフから治療のことだけでなく、食事の宅配サービスなど生活のアドバイスももらえて心強かった。65歳を過ぎたら、がん検診みたいに、気軽に認知機能の検査を受けるようになればいいと思う」と話す。

名古屋の女性 家族の介護前向きに

「診断がついて安心した」

約1%）。そのうちの約六千九百人（27%）が精密検査が必要とされ、実際に受けた約千九百人のうち、60%が認知症、27%が前段階の軽度認知障害（MCI）と診断された。ただし、精密検査の費用は自己負担で、対象者の七割が受けていないことが課題だった。市のアンケートでは、「自分は健康だ」などとして検査を拒むケースも目立つ。市は受診率向上のため、今年四月から精密検査の費用も全額助成する制度をスタート。政令指定都市では神戸市に続いて二例目の試みで、医療機関や負担割合によって異なるが、一人当たり約八千円の助成を見込んでいる。手続きは十月からで、書類に領収書を添付して申請する。地域ケア推進課の担当者は「受診を促し、認知症やMCIの疑いのある人を早い段階で治療につなげたい」と話す。